

広陵町埋蔵文化財調査概要 3

百濟寺範囲確認調査概報
百濟寺防災施設工事に伴う発掘調査概報

1990

広陵町教育委員会

広陵町埋蔵文化財調査概要 3

昭和63年度

百濟寺範囲確認調査概報

1990

広陵町教育委員会

序

奈良盆地のほぼ中央部を北流する曾我川に接して百済の村はあります。大字百済のなかの二条の北辺部を占めて百済寺があります。現在は、本堂と塔が残っているだけですが、三重塔は、第34代舒明天皇がこの地に百済大寺を造営された時の九重塔の名残りであるとされ、国の重要文化財に指定されています。

今回の発掘調査は、この古代政治史上、重要な百済大寺の範囲を確認し、無秩序な乱開発を未然に防ぐことを目的としたものです。

また、三重塔の自動火災警報装置、防火水槽等、防災施設設置に伴う発掘調査の概要をまとめております。

本書に示した調査成果が幾分なりとも御活用いただければ幸いに存じます。しかしながら、まだまだ不備、不足な点がなるかと思います。御批判、御教示を賜れば幸甚です。

広陵町教育委員会

教育長 上村恭三

例　　言

1. 本書は広陵町教育委員会が、昭和63年度国庫補助事業として実施した奈良県北葛城郡広陵町大字百濟所在の百濟寺範囲確認調査概報、百濟寺防災施設工事に伴う発掘調査概報である。
2. 発掘調査は奈良県教育委員会文化財保存課、奈良県立橿原考古学研究所の指導を得現地調査は広陵町教育委員会があたった。
3. 調査に際しては土地所有者をはじめ、大字区長、付近在住の方々に御理解と御協力を賜った。記して感謝します。
また、調査補助ならびに整理、概報作製にあたっては、前嶋祥江、福井悟、前嶋康江、伊藤敬太郎、多田慶子、高井美智子、蒲生玲子の諸氏に協力していただいた。
4. 調査にあたっては広陵町古文化会、会長坂野平一郎氏の御教示、御協力を賜った。
5. 本書の執筆、編集は井上義光がおこなった。

目 次

百濟寺範囲確認調査概報	
I 調査の契機	1
II 調査の概要	2
1 第1トレンチ	2
2 第2トレンチ	6
3 第3トレンチ	7
III 出土遺物	7
IV 結語	8
百濟寺防災施設工事第一次調査概報	
I 調査の契機	9
II 調査の概要	10
1 Aトレンチ	10
2 Bトレンチ	12
3 Cトレンチ	12
4 Dトレンチ	12
III 遺物	13
IV 結語	16
百濟寺防災施設工事第2次調査概報	
I 調査の契機	17
II 調査の概要	18
1 防火水槽トレンチ	18
2 I-1~3トレンチ	19
3 II-1、2トレンチ	21
III 遺物	21
IV 結語	22

I 調査の契機

奈良県北葛城郡広陵町百濟所在の重要文化財百濟寺三重塔は、第34代舒明天皇が即位前に聖德太子から譲られた「熊藏精舎」を百濟川のほとりに移し舒明天皇12年(640)に建立された百濟大寺九重等を鎌倉時代に再建されたと伝えられている。

今回の調査は寺伝として残る百濟大寺の範囲を確定し、保存をはかることを目的に昭和63年度

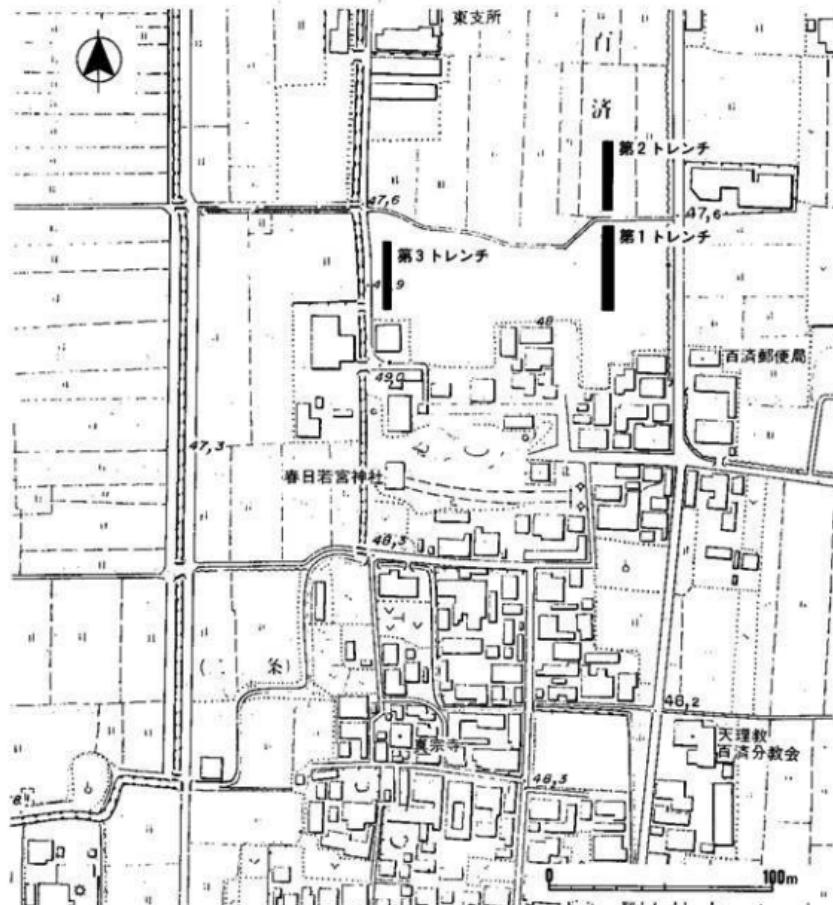


図1 調査位置図

国庫補助事業としてその北限にあたる部位の調査を行なった。現在、百濟大寺北辺部と推定されている県道田原本広陵線周辺から南では、広陵町農協東支所、靴下工場、奈良交通百濟操車場等の開発が行われている。

調査は、平成元年2月1日から3月31日まで行なった。

調査トレンチは、推定されている寺域の北東限に町道を界して2本のトレンチを設け、北西限についても範囲確認のためトレンチを設定した。

II 調査の概要

調査の概要については、調査順に三重塔の北約70mの地点に設定したトレンチを第1トレンチとし、そこから町道を界したトレンチを第2トレンチとした。また推定寺域の北西辺に設けたトレンチを第3トレンチとした。

1. 第1トレンチ

第1トレンチは、重要文化財百濟寺三重塔の北約70mの地点から南北方向に設定したトレンチである。現状では盛土が厚いため壁に角度をつけ2段にトレンチを掘削した。第1段は幅8m、長さ38m程で第2段目は、幅5m、長さ36m程になった。

造構面は、上下層に分かれ上層からは、溝状造構、南北方向、東西方向の中世素掘溝を検出した。溝状造構は調査トレンチの中央北寄りで検出したもので南から北にかけて下降し、溝南端で中世素掘溝に接続する。

造構検出面は、標高46.80mで、溝は幅2.5~2.8mを計り、長さは検出面で13.50m以上をはかる。南から北にかけ徐々にレベルを下げ、造構の南端では、東方向からのがた同様の溝状造構が合流する。幅は上場で4.0m、下場で2.5m、深さは、約80cmである。造構のベースは暗灰色の粗砂層で、検出した溝のはば中央には、同じ暗灰色粗砂層ベースが溝に直交する形で土橋状の様相を呈していた。土橋状の盛り上がりは幅1.2m~80cm程である。

埋土は、上下2層以上に分層可能で上層は、暗灰色粘質土及び粘土が堆積し、間層に黄灰褐色粘質土が薄くあり、下層は黄灰粘質土とベースの崩壊土である暗灰色粗砂層からなる。

南北方向の素掘溝は、幅30~50cm、深さ20~30cmで東西方向の素掘溝がこれを切るかたちで検出した。

下層造構面では、3基の土抗を検出した。溝のすぐ南側の土抗SK-01は直径1.8m、短径1.1mを計る長方形円形土抗で深さは50cm程ある。埋土は暗茶褐色を呈する粘質土で造物は認められない。SK-02は、東西3.1m、南北1.5m、深さ20~80cmの長方形土抗で埋土は暗茶灰色を呈する粘土である。SK-03は、不整形土抗で長さ5.5m、幅0.8~3.1mを計る浅い土抗である。埋土は暗茶褐色粘質土である。

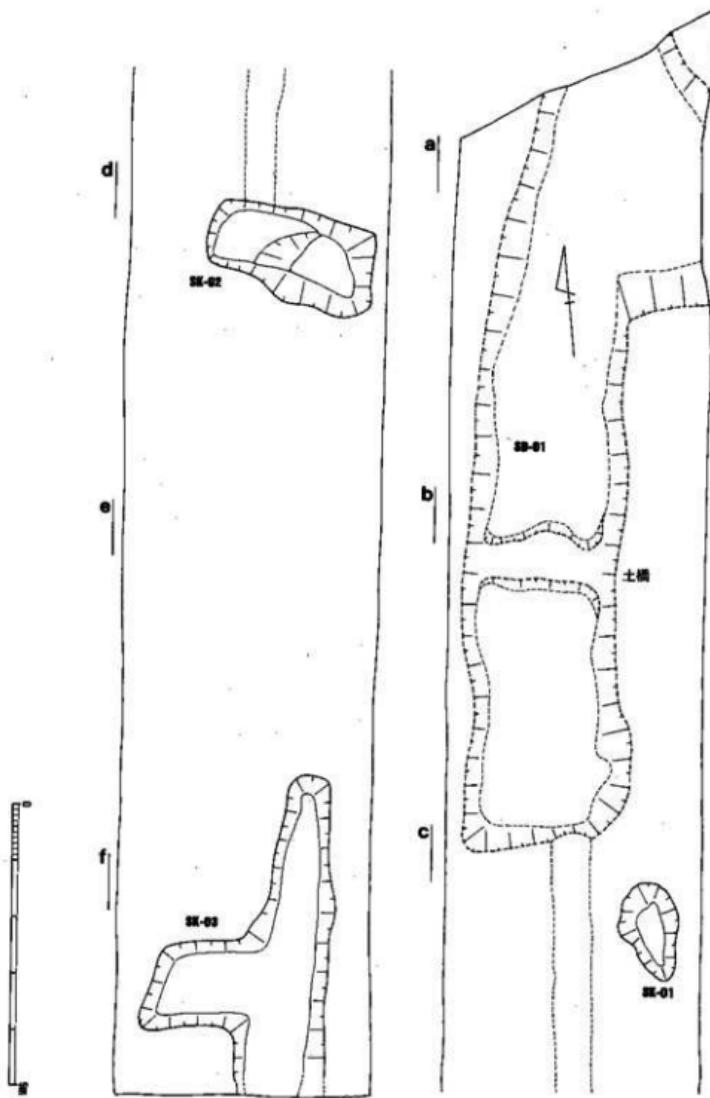


図2 第1トレンチ下層構造実測図

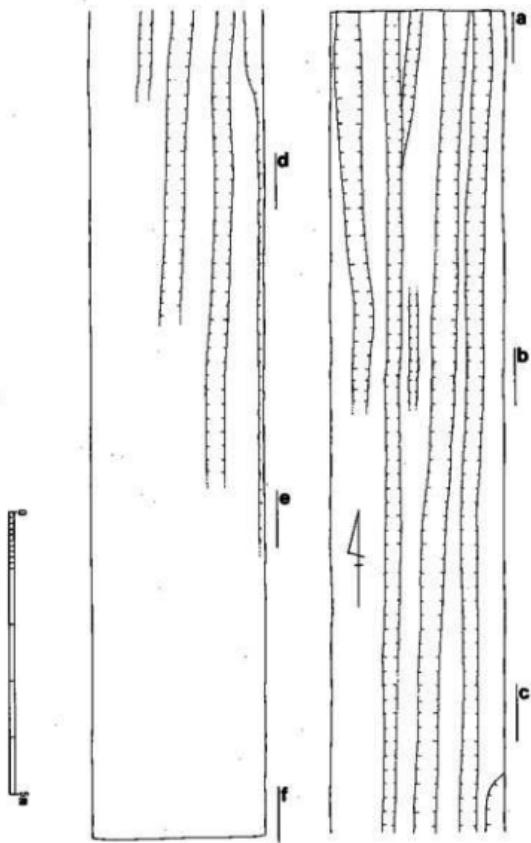


図3 第2トレソチ上層造構実測図

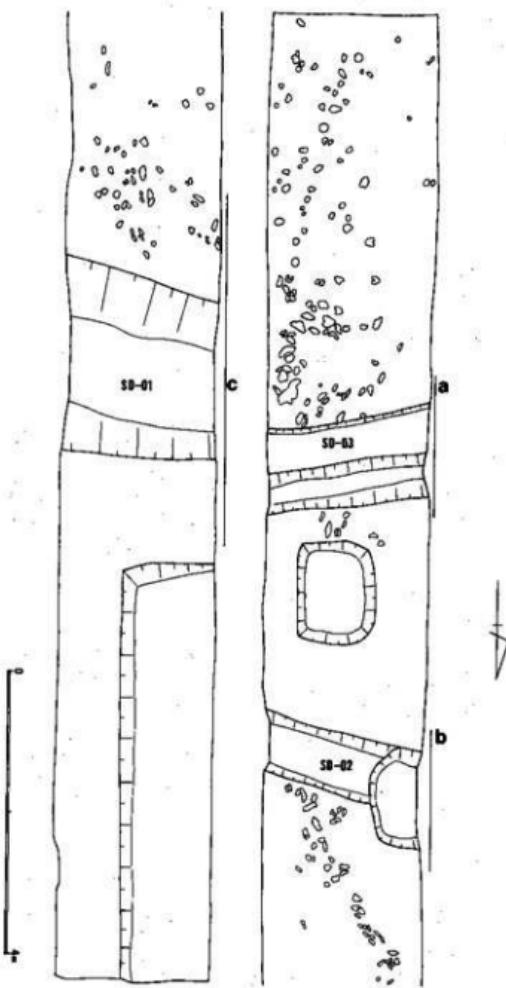
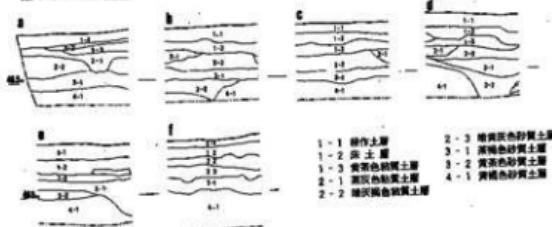


図4 第3トレンチ遺構実測図

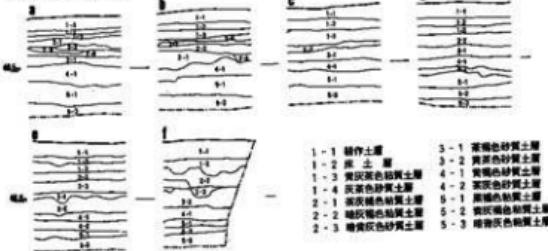
2. 第2トレンチ

第2トレンチは、第1トレンチの北に町道を界して南北方向に設定したトレンチ幅4m、長さ

第1トレンチ西壁



第2トレンチ東壁



第3トレンチ西壁

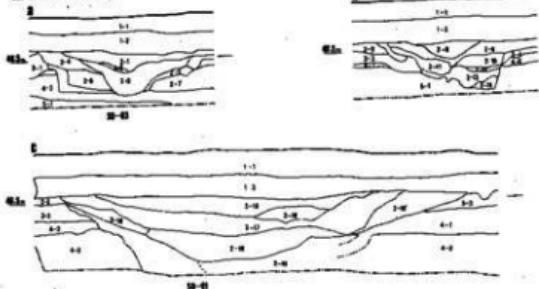


図5 第1～3トレンチ土層抽出図

29.05mを計る。遺構面は、上下層に分かれ、上層で中世素掘溝を検出した。中世素掘溝は、赤褐色粘質土層をベースに南北方向に掘られており、この赤褐色粘質土層は、古墳時代前期の遺物包含層となっていた。

3. 第3トレンチ

推定されている寺域の北西部に設定したトレンチで幅4m、長さ29mの規模を持つ。現状は畠で相当量の盛土がなされていた。基本的層位は、盛土約70cm、旧耕作土（水田）床土45cm、中世埋土層約20cm、その下に赤褐色粗砂層が堆積し、さらにその下が遺構ベースとなっていた。このトレンチでは、素掘溝は、未検出であったが、トレンチ内のうち3箇所で東西方向の溝、素堀の井戸を検出している。いずれも14世紀後半以後の帰属期があたえられる。このほかに赤褐色粗砂層下の暗灰色粘質土上に人、牛の足跡を多数検出している。

SD-01は、幅4.5m、深さ70cm、埋土は、概ね3層に分層可能で最下層からは、14世紀後半以後の瓦器、土師器皿を出土した。

SD-02は、トレンチの南で検出した溝で、幅1.2m、深さ45cmを計り、暗灰黒色の粘土が最下層に堆積する。

SD-03は、幅1.3m、深さ50cm茶灰色系の粗砂層が埋土となっている。

III 遺 物

全て第1トレンチの中央から北部にかけて検出した溝状遺構から出土した瓦器である。

1は溝状遺構の埋土上層から出土した瓦器皿で口径9.0cm、器高1.5cmを計る。色調は暗茶褐色を呈し、焼成は不良である。見込みにジグザグ状のミガキ調整が施工される。これ以外にミガキ調整はない。

2. 3は溝状遺構の下層埋土から出土した瓦器碗である。2は口径15.2cm、器高4.6cmに復元される。暗黒褐色を呈し、焼成は良好である。高台は断面三角形を呈する。ミガキ調整は見込みに螺旋状に2~3回重ねて施した痕跡がある。口縁部外面には不規則な粗い

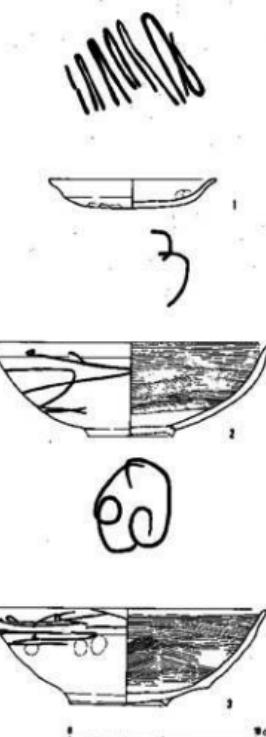


図6 第1トレンチ出土瓦器実測図

ものが残る。

3は口径15.0cm、器高5.2cmを計り、暗黒色を呈する。高台は断面三角形を呈し、ミガキ調整も2と同様である。

2、3は白石編年によるIII-1型式、川越編年第III段階B型式に属する。年代の一端を知る資料としては、当麻寺曼荼羅堂の仏壇製作時の埋納品があり、その製作年代、寛元元年（1243年）がある。1はさらに下る時期の資料であろう。

IV 結 語

調査成果を箇条書にしてまとめにかえる。

1. 各トレンチでは、幅広くトレンチを設定したにも係わらず、検出した遺構は、上層で中世（鎌倉時代末～室町時代）の耕作に係わる素掘溝、下層では古墳時代の包含層及び土坑であった。上下層いずれの遺構面においても舒明天皇の百濟大寺にかかる遺構、遺物は未検出であった。

2. 上層遺構は多武峰の莊園、百濟庄に關係するものと考えられ、貞和3年（1347）の大安寺段米餅田數注進状（春日神社文書）にみえる記事と一致し、該期以降に行なわれた当地での莊園開発の様相を如実に表わしている。

3. 下層遺構では、第2トレンチで検出した古墳時代前期の包含層から庄内から布留にかけて百濟寺の北西部に該期の集落が存在した可能性を推定できる。

百濟寺三重塔防災施設工事に伴う 第1次発堀調査概要

1990

広陵町教育委員会

I. 調査の契機

奈良県北葛城郡広陵町大字百濟に所在する重要文化財百濟寺三重塔の防災施設工事が計画され、昭和63年度から二年継続して国庫補助金をうけ実施される運びとなった。

昭和63年度は三重塔から庫里にかけての自動火災報知装置の設置と、平成元年度の消防設備工事の一部を行なうことになり、配線、配管ルート部分について発掘調査を実施した。

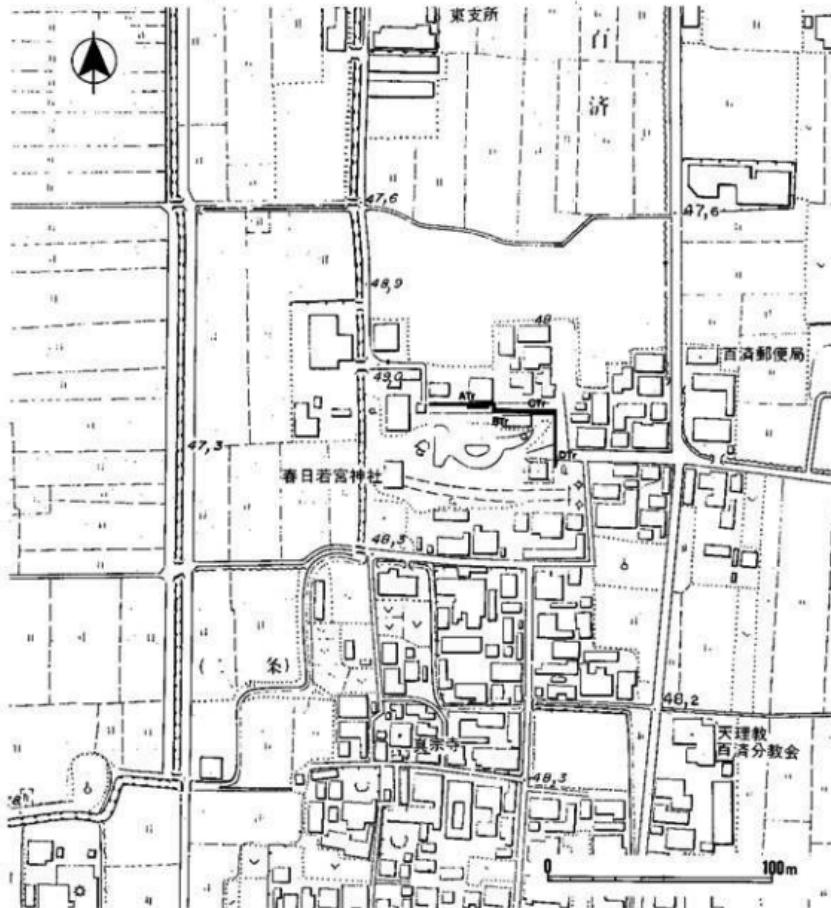


図7 調査位置図

調査方法はルート上の掘方について隨時、立会調査を行い遺物の取り上げを行いつつ、遺構検出部分については精査した。

調査期間は平成元年1月17日から2月3日まで延べ13日間を要した。

精査した箇所は大歓冠と称される百濟寺本堂前で幅1.5m、長さ5mの範囲を行ないAトレンチとした。さらに公衆便所の前で幅1m、長さ3mのBトレンチを設けた。また梵字池の「屯」字のハネ端部で幅1m、長さ3mのCトレンチを設定した。Dトレンチは三重塔の東に幅1m、長さ4.5mの規模で行なった。

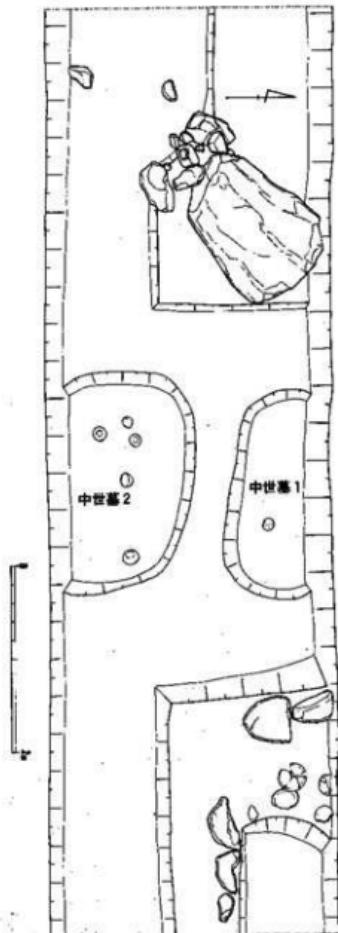


図8 Aトレンチ出土石、地覆石実測図

II. 調査の概要

調査結果については、西側からA～Dトレンチの順に記述する。

1. Aトレンチ

自動火災報知装置の配線ルート上を西側庫裡前から立会しながら掘り方を進めてくると大歓冠前で大形の自然石が出土した。さらに掘り方を進めると平らな自然石が2個並び出土した。そのため幅50cmで行なってきた掘り方を5mにわたり南へ1m程拡張した。

Aトレンチは現在の本堂コンクリート基壇に併行して、基壇の西側コーナーから向拝部分までの範囲である。先述の大形の自然石は本堂の基壇西側コーナーの南約50cmの位置で検出した。頂点で標高48.6m、長さ80cm、幅60cm、厚さ40cmを計る。自然石の基底部には、長さ25cm、10cm程の自然石が積石状に配されていた。

現在の本堂の向拝部分の南約50cmからは、大型の自然石頂点とほぼ同一レベルで長さ20cmの平らな自然石を南北に並列

して検出している。石列はトレンチ内で50cm程南進した後、直角に東進すると考えられるが、石列のコーナーとその東にあったと思われる石は欠落している。

現在の本堂の基壇と自然石配置から、向拝部の南で検出した石列は、本堂の前身建物に伴う地覆石と考えられ、また、本堂基壇の西側コーナーで検出した大型の自然石は、隅垂木を支える礎石であると考えられる。

向拝部分の地覆石と礎石の距離は260cmで、現在の建物の隅軒の下にあたる。地覆石は向拝の出一間、建物規模は桁三間で現在の建物と同一と考えられる。

現本堂は寺伝によると談山神社旧本殿を寛政8年（1796年）にこの地に移築されたと伝えられ、この時に向拝の出を縮める変更が加えられている。この記事と向拝部の地覆石上から出土した土師器皿の時期（13世紀後半）を考慮すれば、検出した建物は、談山神社旧本殿を移築する以前の建造物と想定される。

この建造物の礎石と地覆石の間で直径1.2m、深さ50cmの中世墓を検出している。この南側にも同規模の中世墓があり、土壤内から火葬骨片と瓦器、土師皿（14世紀以降）が出土している。すると改期には先述の建造物はなかったことになる。

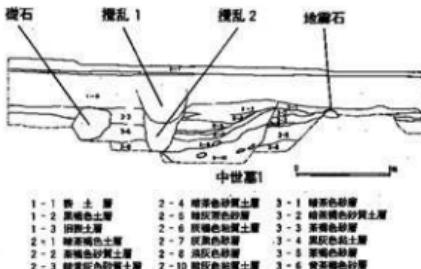


図9 A トレンチ土層断面実測図

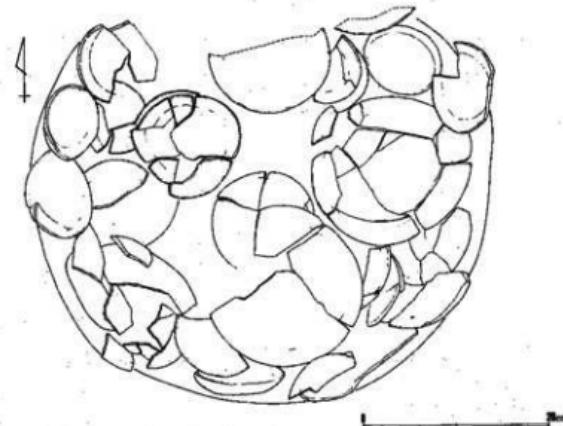


図10 B トレンチ土師皿埋納土坑実測図

2. B トレンチ

B トレンチは、寺域内の公衆便所の南側歩道に幅1m、長さ3mで設定したトレンチで、淡黄色粗砂層をベースに直径50cmの円形土坑を検出した。土坑内には、直径16~18cmの大型の土師皿と12cm前後の小型品が密に詰め込まれていた。地鎮等の祭祀に係わる土坑と考えられる。該期に伴う建造物は未検出である。

3. C トレンチ

梵字池「モ」のハネ部端に幅1m、長さ3mで設定したトレンチで現在の石垣で形成される梵字池の前身と考えられる杭列を検出した。

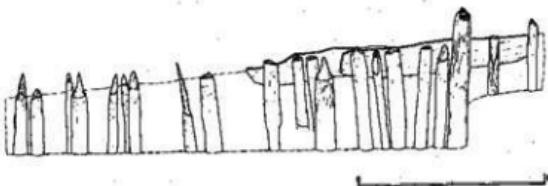


図11 C トレンチ梵字池護岸杭側面図

標高47.80m付近が汀線と考えられ、現在の石垣積の梵字池に沿って、約4m程北側に寄っている。

先述の石垣積の梵字池が昭和5年に行なわれた三重塔大修理の際に、当時板張の護岸を階裏したと伝えられることから、検出した杭列は、それ以前の所産となる。しかし、出土遺物が染付茶碗等、江戸時代のものであるため中世まで遡るとも思わない。

4. D トレンチ

D トレンチは、三重塔の東で幅1m、長さ4.5mで設定した。表土下約1.0mで基盤層に達する。大枠で5層に大別できる。第I層は表土層で昭和5年の大修理以後の堆積土である。第II層は、江戸時代後期から近代までの堆積土で層厚約30cm程あり、5層以上細分可

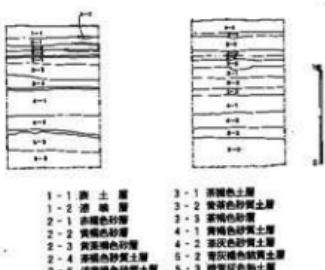


図12 D トレンチ（三重塔東）土層断面図

能である。第Ⅲ層は層厚約40cm程で江戸時代中期以降、第Ⅳ層の該当期を室町時代としたが、整地層であり、三重塔建立に伴うものと考えた場合、その時期を鎌倉時代中期まで遡る可能性もある。それ以下、第Ⅴ層は自然堆積の粘質土または粘土で、12世紀末以降の瓦器、土師皿を包含する。

III 遺 物

1. 須恵器提瓶

Aトレントの東端に近い位置で検出した提瓶である。口径約5cm、器高17.1cm、最大幅16.7cm、最大厚12.0cmをはかる。口縁部を欠く以外は完形である。体部の成形は、マキアゲ・ミズヒキにより体部の2/3以上を造り、それを円盤上のもので蓋をする。さらに、ロクロによって回転カキ目を施し、口縁部を接合している。把手は退化し、カギ形の突起状になっている。田辺編年のTK43、中村編年のII型式4段階にあたり、概ね6世紀第3回半期から末葉にあたる。

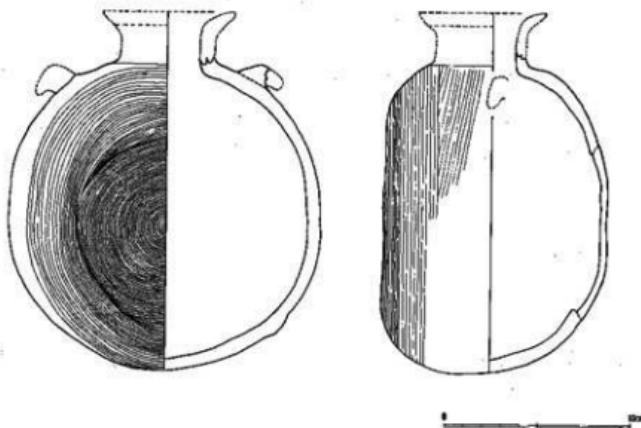


図13 須恵器土提瓶実測図

2. 土 釜

Aトレントで検出した中世墓周辺から出土した土釜である。

1は口径23.6cm、残存高4.2cm、器厚は0.5cm前後で、淡赤褐色を呈する。口縁端部を内側に折

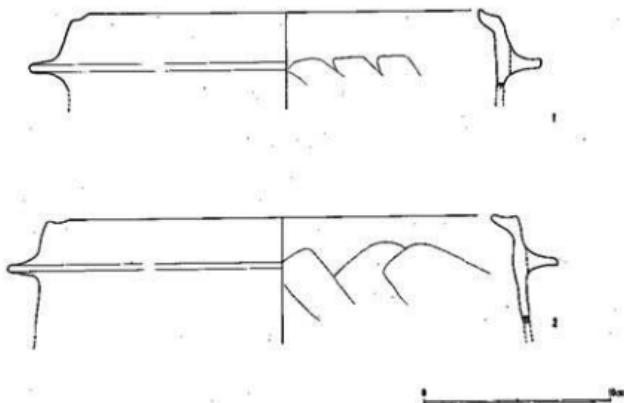


図14 土師器土釜実測図

り曲げておさめた大和H2型に分類される。

2は口径25.4cm、残存高5.2cm、器厚は0.5cm以下である。色調は赤褐色を呈し、焼成は良好である。これも口縁端部を内側に折り曲げておさめる大和H2型に分類される。

後述する土師皿、瓦器碗と共に伴するため、13世紀後半以降の時期があたえられる。

3. 土師皿・瓦器

Bトレントの鎮壇土抗状造構から出土した土師皿（1～12）と、その周辺から出土した瓦器（13～15）である。

土師皿は口径10cm前後、器高2cm前後の小皿と、口径16cm前後、器高3cm前後の大皿に大別できる。小皿は淡赤褐色を呈し、焼成も良好である。いずれも口縁端部を丸くおさめ、内外面をよこなでし、以下は無調整である。

大皿は口縁端部を丸くおさめるもの（9、10）と肥厚させ、段をなすもの（11）つまみあげるもの（12）があるがほぼ同時期と考えられる。

13、14は瓦器皿で口径約9cm、器高1.5cm前後で見込みにジグザグのミガキ調整がみとめられる。

15は瓦器碗で口径12.9cm、器高3.9cmを計る。断面三角形の高台が底部下端より上位に張りつけられ、口縁内部の連続圓線がミガキ調整が粗くなっている。口縁外部のミガキ調整は省略されてしまう。白石編年のIII-2、川越編年の第III段階C型式に分類される。いずれも13世紀後半と

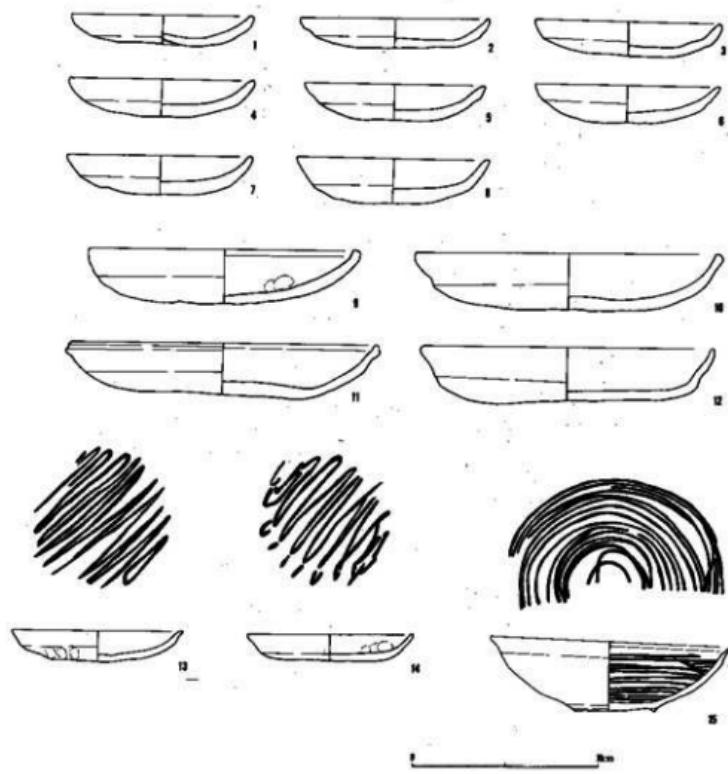


図15 Aトレンチ出土土器皿・瓦器実測図

考えられる。

4. 中世墓出土瓦器椀

大織冠前に設定したAトレンチから出土した瓦器である。1. 2は口径8.8cm、器高3.9cmと3.7cmをそれぞれ計る。口縁内部のミガキ調整は退化し、高台はない。3. 4では口径8.2cm、器高4.0cm、3.9cmをそれぞれ計る。高台はなく、ミガキ調整は口縁内部にかぎられる。

3. 4は川越縄年の第IV段階B型式、1. 2は第IV段階のC型式となり14世紀前半の時期があたえられる。

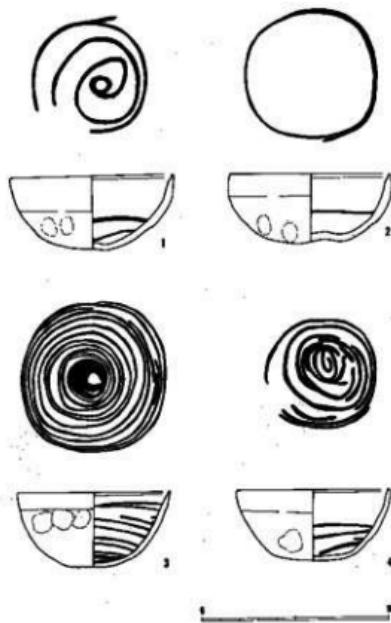


図16 中世墓2出土瓦器実測図

III 結 語

調査の成果を箇条書きにして結語にかえる。

1. 現在の本堂（大職冠と称される談山神社旧本殿）以前の建物を検出した。時期は向拝部の地覆石上出土土器から13世紀後半以前に建てられたと考えられ、中世墓から14世紀前半には崩壊していたと考えられる。
2. 現在の三重塔は舒明天皇の百濟大寺の九重塔の跡に再建されたという寺伝が残るが、鎌倉時代以前に遡る整地層又は基壇は未検出であった。
3. 今回の調査では、寺伝に残る百濟大寺を積極的に肯定する資料は得られなかったが、中世に多武峰の根本莊園となっていた百濟庄と百濟寺の係わりを考える上では、好材料を得たことになる。

百濟寺三重塔防災施設工事に伴う 第2次発掘調査概要

1990

広陵町教育委員会

I 調査の契機

昭和63年度に引き続き、広陵町大字百濟に所在する重要文化財百濟寺三重塔の防災施設工事の一環として平成元年度は貯水槽及び放水銃までの配管工事に伴う発掘調査を実施した。

当初4月から予定していた発掘調査であるが緊急を要する発掘調査が割り込み、先行したため、調査開始時期が遅れた。

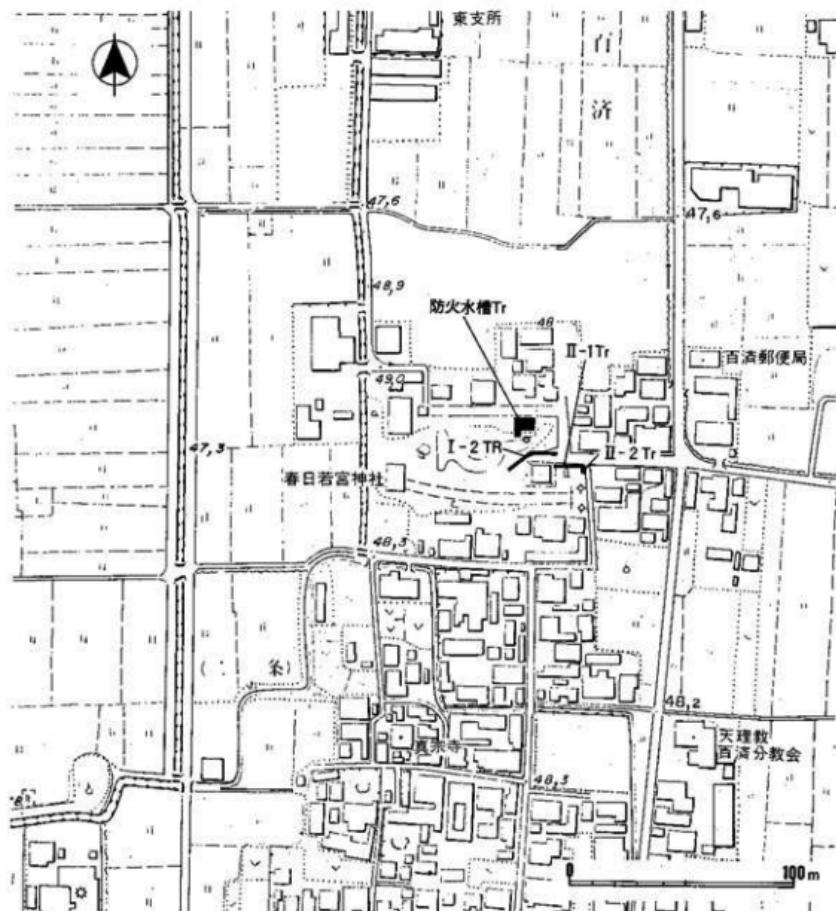


図17 調査位置図

調査方法は、ルート上の掘り方について随時、立会調査を行い遺物の取り上げを行いつつ遺構検出部分については精査した。

調査箇所は防火水槽設置予定地に幅約3.4m、長さ約5.5mで設置し、さらに南に幅1.0m、長さ2.0mの拡張区を設けた。また、放水銃Aに至る配管ルート上に幅1.0m、長さ2.0mの深掘りトレンチを3箇所設定した。放水銃Bに至る配管ルート上には幅1.0m、長さ4.0mの拡張区と幅0.6m、長さ2.0mのトレンチを設定した。

II 調査の概要

調査結果については、防火水槽トレンチ、I-1～3トレンチ、II-1、2トレンチの順に記述する。

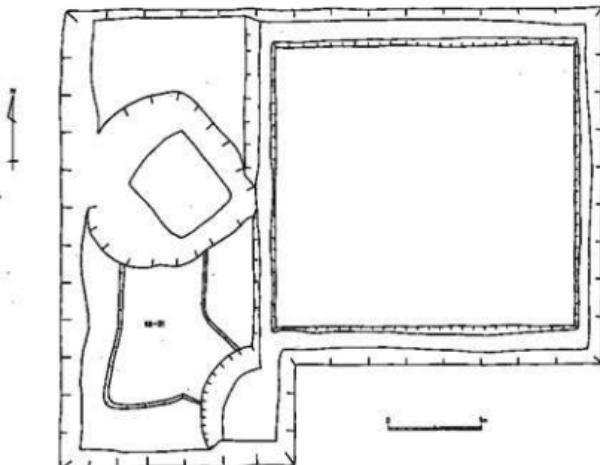


図18 防火水槽トレンチ遺構実測図

1. 防火水槽トレンチ（図18、19）

百濟寺本堂大歎冠の南東部に設定したトレンチである。攪乱坑が無数に穿たれ検出遺構は一基に留まる。基本的層位は、標高46.4mで暗青灰色粘土に至り、その上には約30cmの洪水層(IV層-1～3)があり、該期にたび重なる氾濫があったと考えられる。そのためV層粘土上には人の足跡が残されていた。このトレンチで検出した唯一の遺構SX-01はIV層上面から掘り込まれている。

SX-01（図20、図版10）

SX-01は、残存長1.35m、幅1.0mの隅丸長方形を呈し、残存する深さは15～20cmで、東に幅

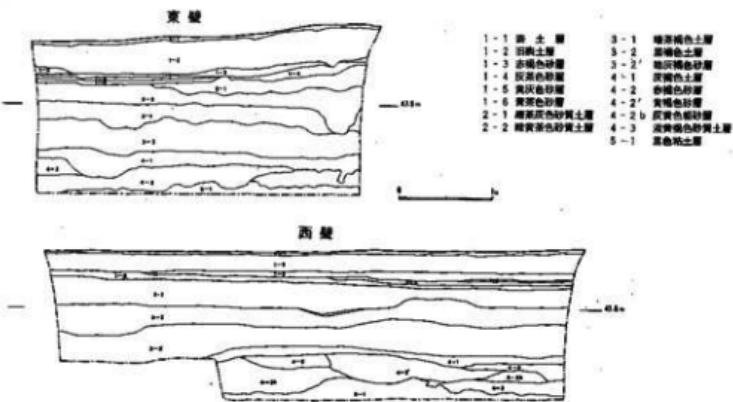


図19 防火水槽トレンチ土層断面図

40cm、長さ40cmの張り出しを持つ。埋土からは、瓦器、土師器、瓦、骨、炭化物が出土している。土器は完形も含まれるが、大半が破損している。退化した瓦器から14世紀後半に時期に形成されたと考えられるが、前年度に大歴冠前で検出した中世墓とは様相が異なるため、それらの墓前祭祀等に使用されたとも考えられる。また、IV層の形成時期が少なくとも14世紀後半以前であることもわかる。

2. 放水銃Aに至るルート 上のトレンチ

放水銃Aに至るルート上で3箇所トレンチを設定したが遺構を検出したのはI-2トレンチだけであった梵字池

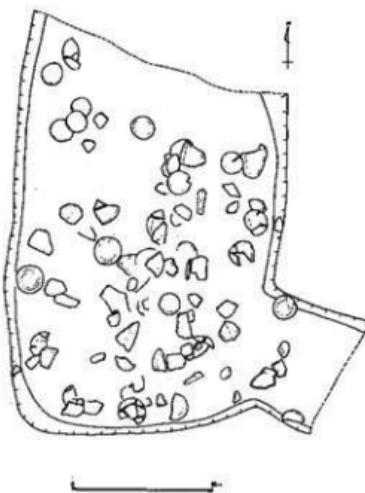


図20 SX-01土器出土状況実測図

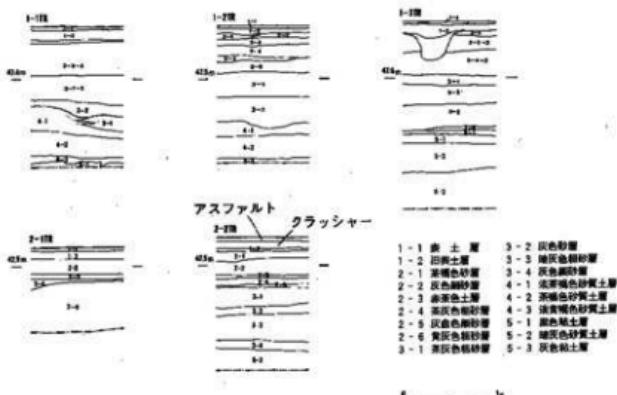


図21 I-2トレソチ護岸施設実測図

「屯」字の旗下端にあたる位置（三重塔の北西隅方向）では現在の石積で形成される梵字池の前身と考えられる杭列を検出した。昭和63年度に行った調査のうちBトレソチで検出した杭列に対応する。調査トレソチの北西壁が汀線ラインとなり、杭は30~35cm間隔で打ち込まれ、岸側には幅約10cm、長さ45~50cmの板が差し込まれていた。形成時期は江戸時代中項と考えられる。

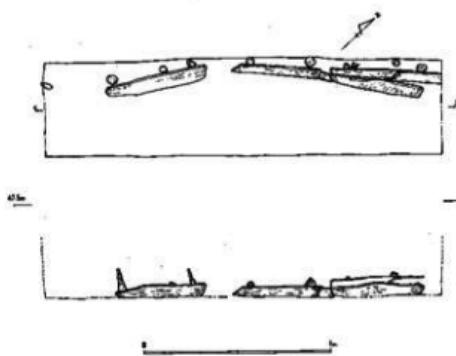


図22 I-2トレソチ護岸施設実測図

3. 放水銃Bに至るルート上のトレンチ

放水銃Bに至るルート上では2箇所トレンチを設定した。II-1トレンチからは長さ3.5m、検出幅50cmの土坑を検出し、内部から幅約10cm、長さ40~50cmの板状の部材を検出した。近代の所産と考えられる。II-2トレンチからは白鳳期に遡る軒丸瓦が中世の土器と共に出土した。しかし、白鳳期に遡る整地層、遺構は認められなかった。

III 遺物

1. SX-01出土土器

1. 2は口径8cm前後、器高1.5cm前後を計るヘソ皿である。3~6は口径9cm前後、器高1cm前後で、底部中央がゆるやかに膨れる点で形状的に1. 2とは分類できる。9~12は口径9cm前後、器高1.5~2.0cm前後、13~16は口径10cm前後、器高2.0cm前後で、口縁端部が外反ぎみに立ち上る。色調は5が黄灰色を示す以外、全て赤褐色系である。

17、18は両者共瓦器焼で口径8.6cm前後、器高4.0cm前後を計る。高台はなく、ミガキ調整も口縁部内に施工される。川越編年の第IV段階B型式となり、土師皿を含めて14世紀前半の時期があたえられる。

2. 軒丸瓦

II-2トレンチから出土した

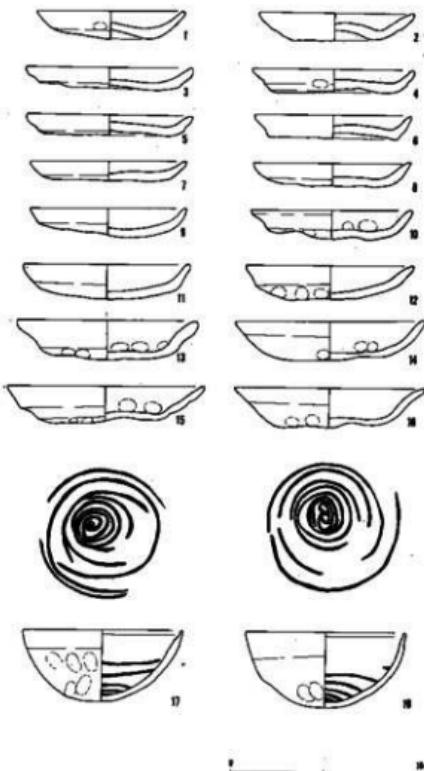
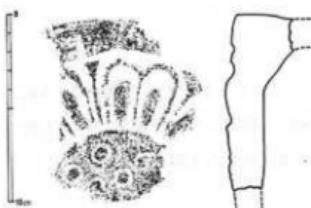


図23 SX-01出土土器実測図



複弁蓮華文軒丸瓦である。瓦当径は約20cm程に復元できる。中房も大きく約9cm程に復元され、蓮子は大粒で、写実的な乳房状にあらわす。花弁は中央に稜をたてて二面分割にし、各面に断面の丸い子葉を配する。周縁は幅広く、上面を内斜面にする。鋸歯文等の表現は不明である。白鳳期、川原寺式の範形と考えられる。

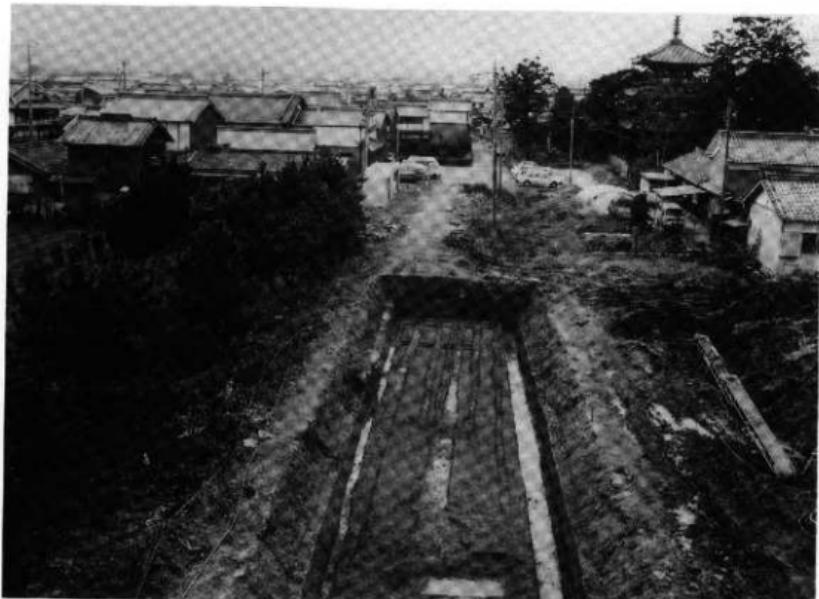
図24 軒丸瓦実測図

III 結語

調査成果を箇条書きにして結語にかえる。

1. 百済寺三重塔は、639年に建立された百済大寺九重塔の再建されたものと伝えられ防災施設工事に伴う発掘調査が百済大寺の一端を知る手掛かりになるものと期待していたが、該期の整地層または遺構は皆無であった。三重塔下の整地層は鎌倉時代中期以前に遡ることはなく、その下は暗青灰色のシルト粘土であることがら九重塔の跡に再建されたとは考えられない。
2. 現在の本堂（大職冠）は江戸時代中期（寛政8年1796年）に談山神社本殿を移築したものであるが、これ以前の建物跡を1次調査で検出した。遺構は隅垂木を支える礎石と向拝部の地覆石で規模は、現在の本堂と同じである。時期は13世紀後半以前と考えられる。
3. 梵字池は空海上人が掘られたと伝えられるが、該期に遡る遺物は認められなかった。検出した遺構は江戸時代中期の「しがらみ」で1次、2次調査検出した。検出した位置は「ゑ」字のハネ端部と腹部下端で現在の梵字池よりひとまわり大きなものであったと考えられる。

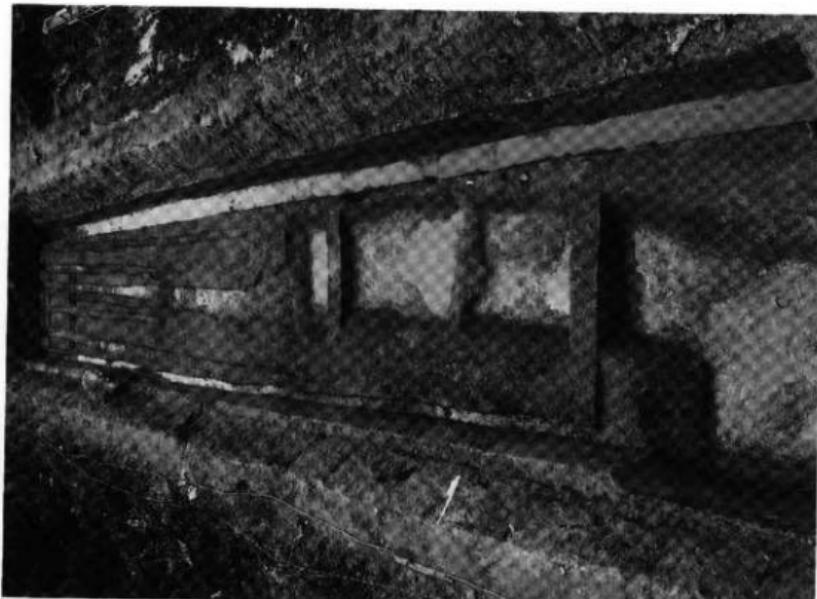
圖 版



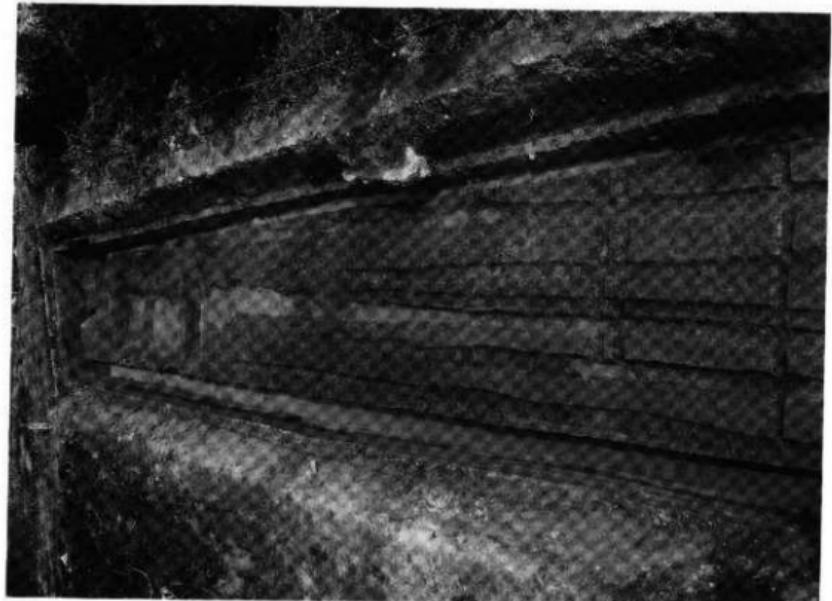
第1 トレンチと三重塔(北から)



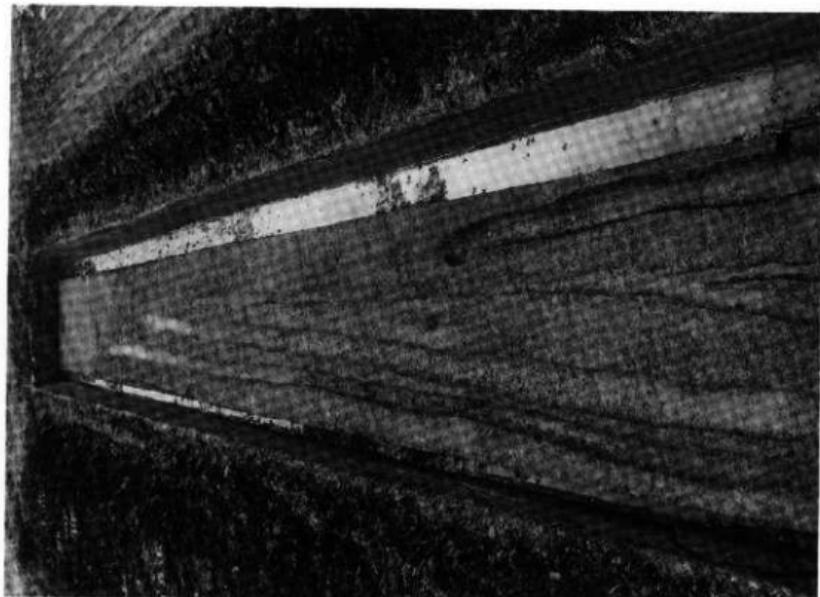
第1 トレンチ溝状造構(東から)



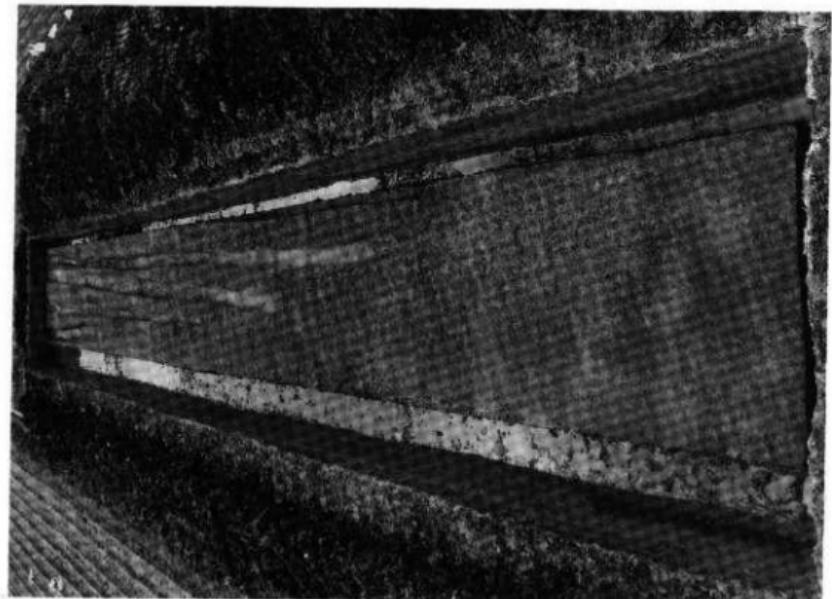
第1トレンチ全景(北から)



第1トレンチ全景(南から)



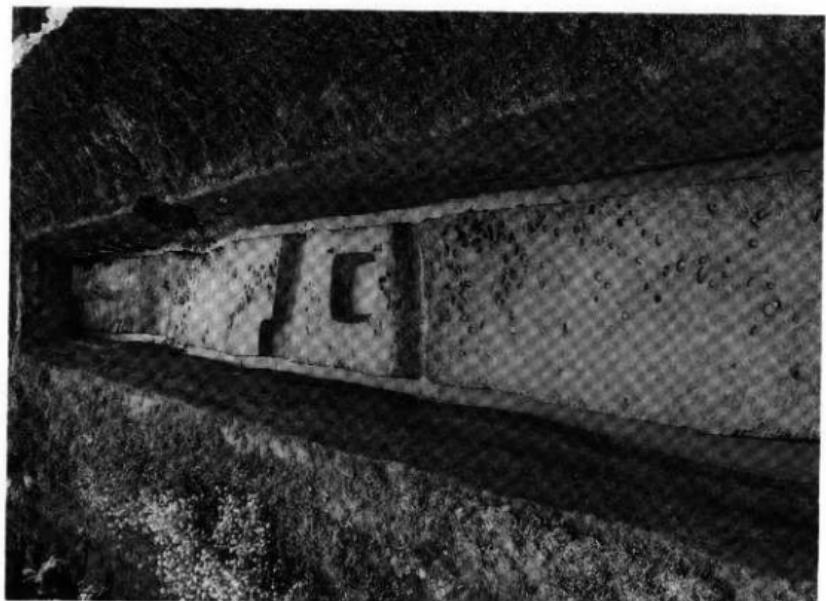
第2トレンチ全景(北から)



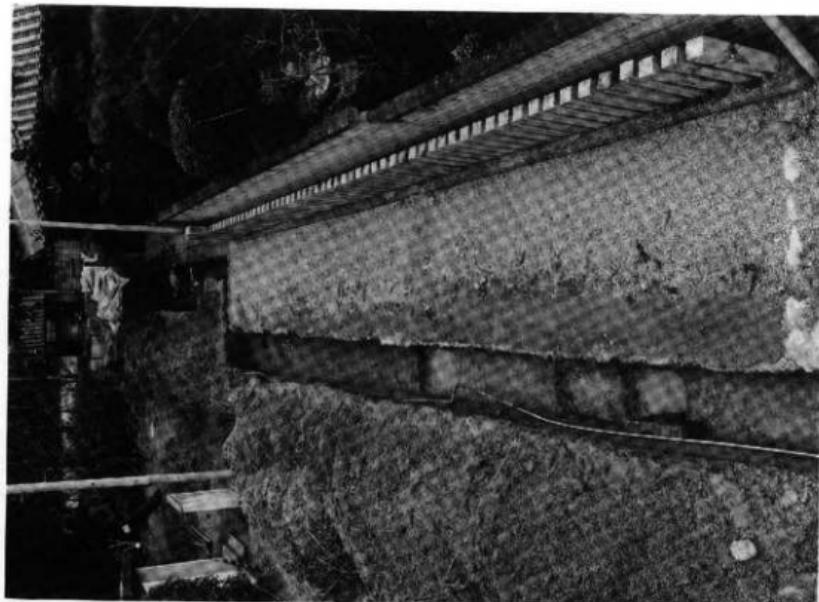
第2トレンチ全景(南から)



第3 トレンチ全景(北から)



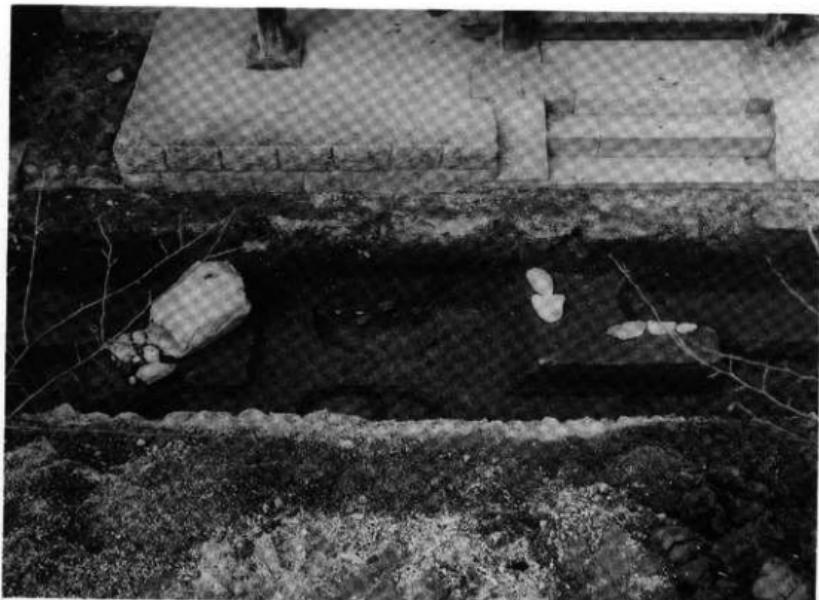
第3 トレンチ全景(南から)



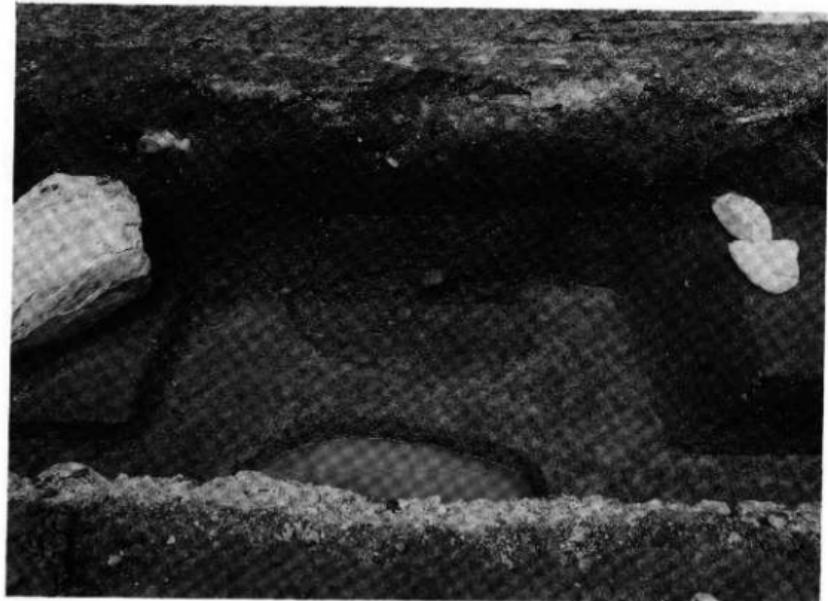
A・Bマークハチ金環(東から)



ロームハチ金環(北から)



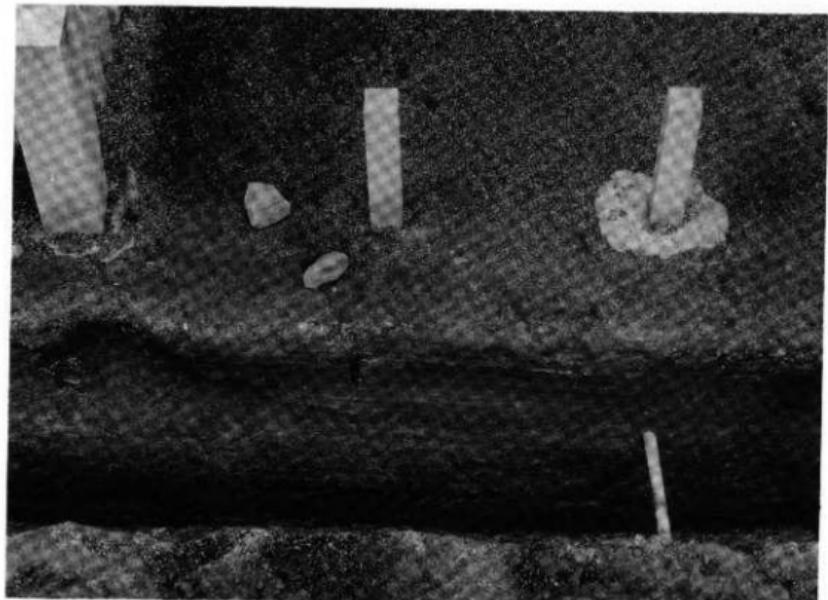
A トレンチ 碓石、地覆石検出状況(南から)



A トレンチ 中世墓検出状況(南から)



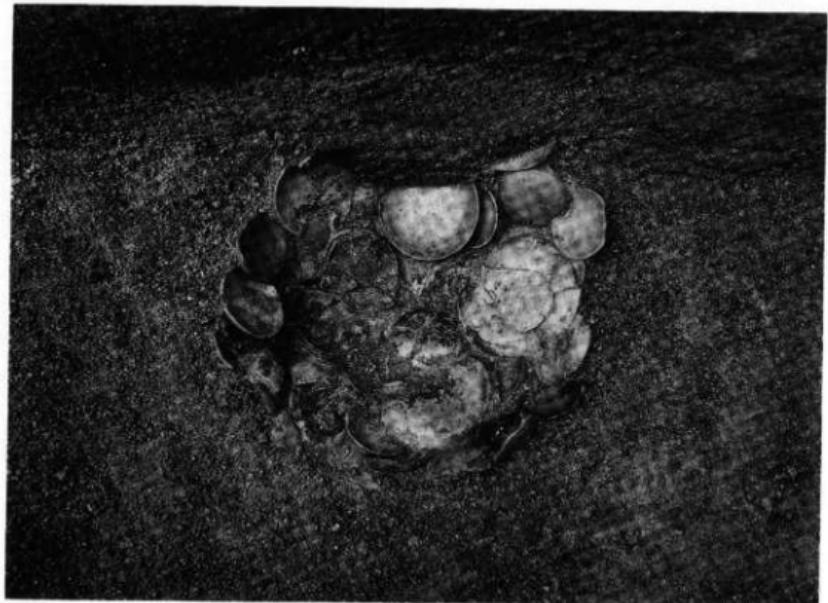
C トレンチ 梵字池護岸施設(東から)



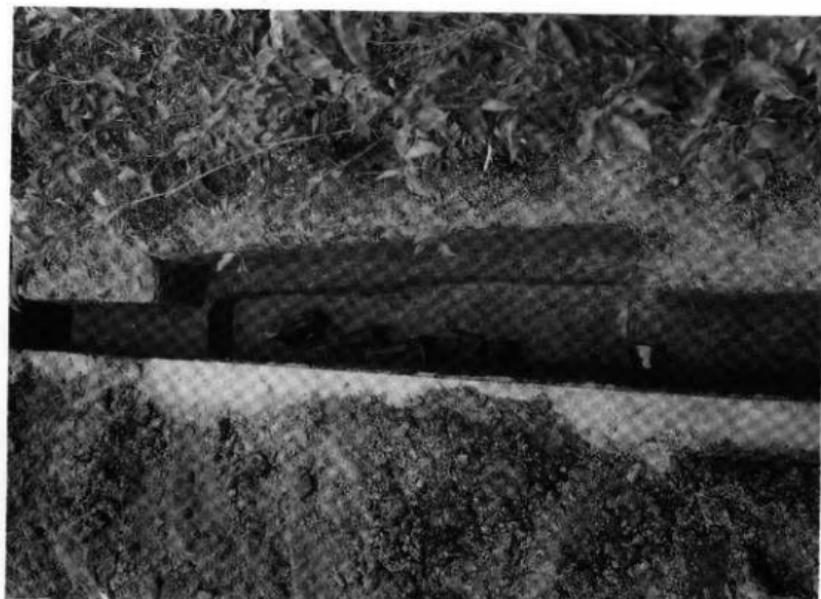
D トレンチ 土層断面(東から)



B トレンチ 土器出土状況(西から)



B トレンチ 土師皿埋納土坑 土器出土状況(南から)



II-2-1-1-18号(西面)



II-2-1-1-18号 横谷泡瀬防護壁(東面)



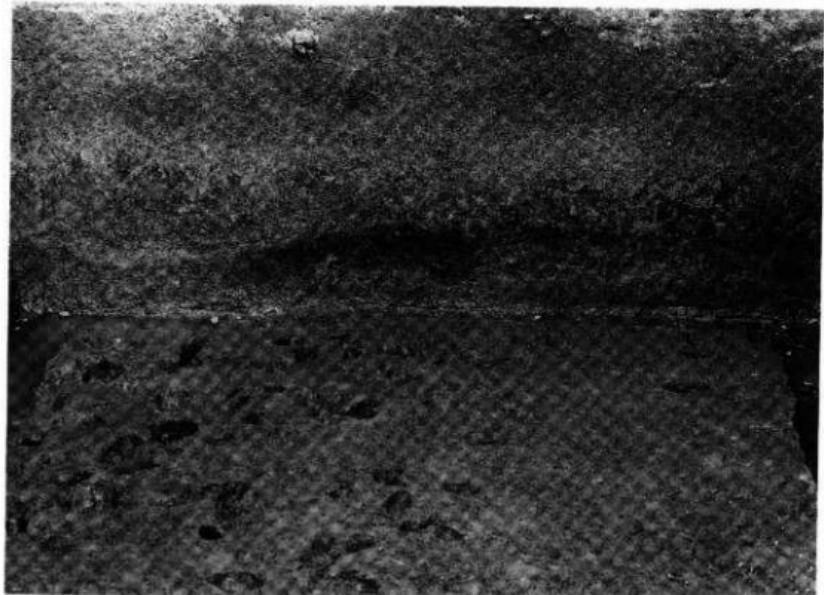
防火水槽トレンチ SX-01 土器出土状況(南から)



SX-01 土器出土状況(西から)



防火水槽トレンチ 足跡検出状況(南から)



防火水槽トレンチ 足跡検出状況(西から)

広陵町埋蔵文化財調査概要 3
百濟寺範囲確認調査概報
百済寺防災施設工事に伴う発掘調査概報

平成 2 年 3 月 31 日
発 行 広陵町教育委員会
印 刷 橋本印刷株式会社